

花の宴

— 日本比較文学論集 —

著者

川口久雄著



吉川弘文館

川口久雄著

花 の 宴

—日本比較文学論集—

吉川弘文館

著者略歴

- 一九一〇年 金沢市に生れる
一九三七年 東京文理科大学 国語国文学科卒業
一九六〇年 金沢大学法文学部教授・文学博士
一九六一―一九六二年 「敦煌資料と日本文学」の課題により在外研究員
現在 金沢大学名誉教授・大東文化大学東洋研究所教授

(主要著作)

- 平安朝日本漢文学史の研究 明治書院
大江匡房(人物叢書) 吉川弘文館
かげろふ日記(日本古典文学大系) 校訂 岩波書店
菅家文章 菅家後集(日本古典文学大系) 校訂 岩波書店
和漢朗詠集(日本古典文学大系) 校訂 岩波書店
古本説話集・本朝神仙伝(日本古典文学大系) 校訂 朝日新聞社
西域の虎―平安朝比較文学論集― 吉川弘文館
菅家文章・菅家後集詩句總索引 明治書院(若林力・共著)
梅沢本架花物語影印 勉誠社

花の宴―日本比較文学論集―

昭和五十五年三月一日印刷
昭和五十五年三月十日発行

定価二、五〇〇円

著者 川口久雄

発行者 吉川圭三

検印省略

発行所 株式会社 吉川弘文館

東京都文京区本郷七丁目二番八号(郵便番号一三三番)
振替東京〇―二四四番/電話〇三―八一三―九一五(番代表)
理想社印刷/誠製本

目次

古典文学篇

みやびの系譜

——昔男と光源氏の間像——

花の宴と繚乱の漢風文化

唐代伝奇文芸と平安朝物語文学

『本朝麗藻』の世界

——花の宴詩と贈心公古調詩——

流謫悲歌

——道真詩における抒情——

禅林山居詩の展開について

——道元山居十五首と絶海山居十五首——

『つれづれ草』の源泉としての漢籍

芭蕉における中国と日本における杜甫

2

21

29

57

98

114

139

154

比較文学篇

森鷗外の『即興詩人』

西方から日本への視線

——マゲニチユードの日本学の人たち——

ソヴェトにある日本文学関係敦煌資料

ダブリン初秋の花々

日本文学から見た中国文学

196

200

233

245

248

後語

索引



敦煌 428 窟 薩埵王子變相 投身銅虎
甘肅省 敦煌縣 莫高窟 千仏洞

みやびの系譜

——昔男と光源氏の間像——

1

薄雲の女院は『伊勢源氏十二番歌合』に二条后とつがって首部に出てくるし、菱河師宣の『いせ源氏色紙つくし』では源氏絵の冒頭に出てくる。その絵解きの結びは人も知る、

入り日さすみねにたなびく薄雲は

もの思ふ袖に色やまがへる

の歌だ。亡き母に似ているといわれて、光源氏は五歳年上の若い継母に迫って、ついに秘密の胤を孕

- 1 幻巻における薄雲のうた
- 2 みやびをになう王朝教養階級
- 3 伊勢物語における龍田川のうた
- 4 伊勢・源氏におけるみやびの機構
- 5 原始思考と文化主義的思考
- 6 王朝密教と好色的精神
- 7 人生は幻化にすぎない

ませる。源氏十八歳の四月のある日である。罪をせおつた苦惱の女はそれから十四年を生きて、出家の後に死んで行く。右の歌は光源氏がその死をひとりかみしめてよんだ悼亡の詩、わが国ぶりの葦露の行の文句だ。だが彼は人間の無常を葦上の露にくらべてはかないなどと一般的ななげきをなげいたりしない。

いり日のさすとき

薄いろの雲がみねにたなびく

ああ雲の色さえ物思うわが歎きの鈍いろ——

アーサー・ウェイリーは、この歌を、

Across the sunset hill

there hangs a wreath of cloud

that garbs the evening

as with the dark folds

of a mourner's dress.

とイギリスの現代語に訳した。

入り日の丘をよこさまに

薄雲の環がたなびく

なげきも深い喪のころも

そのくらい衣のひだをもて

このゆうべをよそわせる

とでもいうところか。西欧のよき人の目にもこの詩はことに美しいとみたのであろうか。⁽¹⁾

さて紫式部はこの歌の直ぐ前に念誦堂にこもった光源氏をして「ことしばかりは」とひとりごとをさせている。その散文の詞と、この韻文の歌とが交錯するところに、私は紫式部の内部にある「みやび」の精神構造がちらりと顔をみせているように思う。それは単なる悼亡の悲しみでない。いうまでもなく古典詩の残像を背景とする。

深草の野辺の桜よ

お前に亡き人をいたむ心があるならば

せめてことしだけは墨染いろにさいておくれ⁽²⁾

という classical allusion がある。あるフランスの友人が、これは前衛的なシュール・リアリズムの絵を思わせるといった。薄墨桜——それは決して自然そのままでない、繊細な洗練された美意識が架空のキャンパスに描き上げた幻想世界、さもなければ天平宮廷にもてはやされた高度な染色工芸美の世界でないか。

韻散交錯のかたちで、紫式部が内部世界の深い美的体験をうち出しているのではないか。なまの自然美でない、人工的な工芸美の染め出す世界——それをみやびとも、教養ともいうのではないか。

2

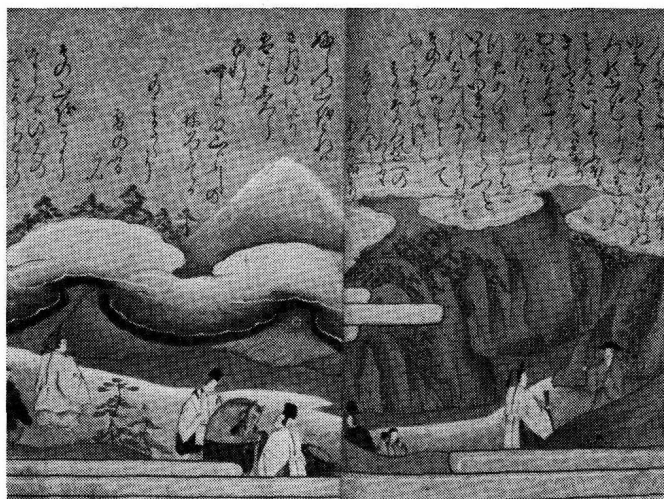
文化をになう階層として宮廷貴族は、私見によれば八世紀に形成され、九世紀に確立され、十世紀に変容転回し、十一世紀に開花し、十二世紀に頹廢したと一応考ええるとして、宮廷貴族文化の原型が一応出そろうのは九世紀の嵯峨朝、それらが見事に開花するのは十一世紀の一条朝だとしばらく私はわりきって考えることにする。九世紀後半の宇多朝文化は嵯峨朝のフーガであり、十世紀の醍醐朝・村上天朝は十一世紀一条朝の前奏曲プレリュードだとみることもできようか。もちろん図式的思考のゆがみを内包しているけれども。

さて教養の問題は必須の問題としてそれを可能ならしめる経済の問題とからみ合う。宮廷貴族の教養をこの制約のある小論文で正面から攻めることは困難があることは論をまたない。今はとりあえず王朝教養の典型として、九世紀を生きた業平朝臣、十一世紀に造型された光源氏のふたりをとりあげ、その作品の一斑をできるだけ掘りさげてみて、宮廷貴族の具体的な教養の水脈——みやびの系譜をさぐりあててみたいと思う。

3

在五中将を主人公とする『伊勢物語』の中に、

むかし、おとこ、みこたちのせうえうしたまふところにまうで、 たつた川のほとりにて



ダブリン本 伊勢物語 絵入本 うづの山・するがの富士のくんだり
 チェスター・ピーティ コレクション ダブリン

千はやふる神よもしらずたつた川

からくれなるにみづくゝるとは(泉州本)

というのがある。プリンスを含めた宮廷貴族たちが龍田川で逍遙遊覧したおりの歌である(二句大島本等「かみよもきかず」に作る)。試みに近刊の森野宗明氏の現代語訳をみると「神代の頃でさえも聞いたことがない、この龍田川で、このようにみごとにあざやかな紅色に水をくくり染めに染めるといふことは——」(前後を省略)という風にのべて、韓国渡来の紅、あざやかな深紅色というコメントを「からくれなる」につける。八・九世紀は新羅・百濟・高句麗三国を新羅が統一して慶州を中心にして、石窟庵の十一面観音像にみるように繊麗優雅な芸術が花開いた黄金時代であるから、染色工芸も進歩していたに違いない。から紅を唐のそれでなく韓国のそれと森野氏が考えた所拠を知らないが、ありうる

ことと思う。天平期の工芸品のなかに藤纈染・夾纈染・綴纈染などの高度の染色技術による遺品があるから、いわゆる絞^{しぼ}り染めである夾纈すなわち綴纈染はもちろんわが国で平安初期行われていた。あるいは絞^{しぼ}り染めでも両面染のような複雑な技法も行われており、今の場合、紅葉の型を白地に絞^{しぼ}って韓紅に染めただけでなく、地に紺碧の水の色をも染めたかと思われる。³⁾——龍田川の碧い淵に紅葉が点々と散って浮いている。藍の水に映発する紅葉の濃い紅の色、それはまさしく韓国渡来の紅の染料で纈纈染に染め、地を濃藍に染めあげた染色工芸の見事な彩色と文様でないか。要するに龍田川の紅葉の自然美を、天平以来の染色工芸美の作品によそえてうたいあげている。それは六朝詩、初唐詩にみる見立ての作詩技法にほかならない。

『古今集』では同じこの歌が、周知のようにさらにちがった情況におかれる。「二条の後の春宮の御息所と申しける時」に、「龍田川に紅葉流れたる絵^{かた}を画^かけりける」御屏風絵に題してよんだ色紙形の歌だとして、素性法師の作にならべてまさに業平朝臣の作と明記する。この屏風絵はおそらく初期の倭絵屏風で、素朴なすみぎきに、彩色を加えたものと思うが、屏風歌としてみると、なまの自然からさらに一層遠ざかり、二重に芸術的な操作を経ていることになる。だからそれはありのままの自然美の写実的描写でなく、歌枕的な意識で選別され、四季屏風の名所絵として絵画的形象を与えられ、次にその場面を題とした題詠歌、いかえれば題画の歌としてよむことを東宮妃なる女性から課され、染色工芸の美とみたてて、一首の歌を作り、それを色紙形に草仮名の美しいはなちがきで表記したにちがいない。みやびとみやび、幾種類かの工芸美術をつみあげて達成した詩歌作品である。ここに一

首の歌ながら、それは業平という一歌人の作品をこえて、時代の教養、時代の美意識、時代の文化一般がきらめくように結晶しているということもできようか。そしてその背後にアジア大陸の先進文化圏から海を渡ってきた文化財というものが官廷貴族社会の教養に大きく影響滲透していることを思わずにはいられない。

4

龍田川の歌には「ちはやふる神代もきかず」という上の一・二句がある。⁽⁴⁾韓紅の染料で（きぬでなく水をくくり染めにするなどということとは、神秘的なことがあった神話時代だつてきいたことがないという、理窟に合わない妙なことだということを上下の句をつき合わせて興ずるといふ古今集的な歌の発想であるが、天平以来の染織工芸美を下の句で指し示すと共に、神話時代への回想を上句でとりあげる。『遠鏡』で本居宣長はこの訳をつけている。

此立田川ヘシゲウ紅葉ノ流レルトコロヲ見レバ、トント^{ベニカノコ}紅鹿子^{ベニ}紅シボリト見エルワイ。サテノ
奇妙ナコトカナ。神代ニハサマザマノキメウナ事共ガアツタチヤガ、此ヤウニ川ノ水ヲ、^{ベニ}紅ノク
クリゾメニシタト云コトハ神代ニモイツカウキカヌコトヂヤ。

「サテノ奇妙ナコトカナ」という発想の効果は、素性の「蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を珠とあざむく」という場合の発想の効果と同様の、不思議だ、奇妙なことだ、理窟にあわなないといった古今集独特の発想機構であるが、「ちはやふる神代」をもち出すことによって、原始の素朴、土

着的な美意識を基準にして、近代の工芸品的な、舶来的な美的体験をつき合わしている。神代の素朴主義と対比することにより、宮廷的なみやびの文明主義が一層みやびやかな華麗さを増幅する。おそらく惟貞親王家歌合の歌だとする筋切や元永本古今集の詞書にあるように、この歌は歌合歌として屏風絵を題に絵解き歌として競作された作品であるにちがいない。龍田川逍遙の現場体験の実景による作ではあるまい。寛平宮廷貴族のみやび、教養主義の雰囲気眼前にみえるようである。

ところで業平の歌に遠い神話時代の回想がとりあげられることによつて、みやびが浮彫りにされることをみてきたのであるが、同様のことが光源氏のよんだ薄雲の歌にも認められるのでなからうか。上の句「いり日さすみねにたなびく薄雲」は、かの万葉以前の姿をとどめるといわれる南島の神歌『おもしろ』に歌われる世界でないか。岩波日本思想大系18は外間守善・西郷信綱両氏校訂の『おもしろさうし』であるが、その巻頭口絵写真に琉球大学図書館所蔵仲吉本第十、『ありきゑとのおもしろ御さうし』の珍重すべき一葉の影片が掲出されている。

一	ゑけ	あかる	<small>〔みかつき〕</small>
	ゑけ	あかる	<small>〔三日月や〕</small>
	ゑけ	かみき	<small>〔神〕</small>
	又	あかる	<small>〔金真〕</small>
	又	かみきや	<small>〔かなまゆみ〕</small>
	又	あかる	<small>〔明〕</small>
	又	かみきや	<small>〔あかぼしや〕</small>
	又	あかる	<small>〔金〕</small>
	又	かみき	<small>〔かなまゝき〕</small>
	又	あかる	<small>〔群〕</small>
	又	かみき	<small>〔あかぼしや〕</small>
	又	あかる	<small>〔ほれぼしや〕</small>
	又	かみき	<small>〔さしくせ〕</small>

又 羸け あかる 〔横雲〕
 のちくもは

又 羸け かみか 〔神〕
〔雲〕まなき、おび

天体の美をたたえるおもしろの珠玉の一つである。これを、明治四十四年十二月に最初に刊行して、おもしろ七種の一として紹介した伊波普猷の手訳をかがけておく。

あれ 天なる三日月は

あれ 御神の金真弓

あれ 天なる明星は

あれ み神の金鏃

あれ 天なる群星は

あれ 御神の花櫛

あれ 天なる横雲は

あれ 御神の御帯

伊波普猷は「さながら希伯来の詩篇を誦する心地がする。多分我等の祖先が夏の夜の航海中熱帯の蒼穹を仰いで、星昂の燦爛たるを觀、覚えず声を發してその美の本源なる神を讚美したものであらう」といって、「年中雲霧に蔽はれがちな大和・山城にゐた万葉・古今の詩人はかういふ自然は夢にだも見なかつたであらう」といい、西歐詩の遺蹟さえあると言及している。⁽⁶⁾紫式部の生きた時代の山城の空も空氣の澄んだ秋の晴れた夕方は、「あれ、天なる横雲は、あれ、御神の御帯」と讚えたくなる原

始感覺をよみがえらせなかつたとはいえない。

外間守善の注によれば「のちくも」の「のち」はヌチといい横糸を意味する。即ち横糸のようになびく美しい雲、対語「あやくも（縷雲）」という。入り日空に横にたなびく薄雲の美を紫式部は適確にとらえてなげきの光源氏をして凝視させるのである。

夕日はなやかにさして、山際やまぎはの木ずゑあらはなるに、雲のうすくわたれるがにび色なるを、なにごとく御めとどまらぬころなれど、いと物哀れにおぼさる。

入日さす峰にたなびくうす雲は

物思ふ袖にいろやまがへる

とある、その薄雲をA・ウェイリーは a wreath of cloud と訳する。リースは花冠とか雲の輪、雲の花環の意味である。おもろの横糸のように美しい横雲というのにかにも適切な訳語といえよう。まさにおもろ的な海洋歌謡の古代的発想につながる。その上の句の素朴な感覺のゆえに、にび色に花さへも咲けとひとりごとく光源氏のつぶやきは何げないだけに、いっそう美しくあわれは深い。

——雲も物を思ふにやとのよしなり

と古注がコメントするように、素朴な原始感覺につながる感情移入がある。それは木がものを思い、石がものいう太古、木思石語の神話時代の系譜につながるかもしれない。しかもその発想が、同時にもつとも前衛的なシュール・リアリズムの詩の感覺につながって表現される。見事な抒情詩、瀟洒な洗練された芸術美のイメージといえよう。にび色の横雲に投射する土着的な感情移入、にび色に咲く

さくらの花の近代的感覺の映像をつぶやく独白。それは、まひるの花の讚歌でなく、斜陽に照らし出される薄墨さくら。午前の日をあびる自然美の写実でなく、夕暮れどきの頹廢をはらんだエレジーである。このエレジーのかげに「二条院の御前みまへのさくら」が夕かげに咲きそろっている。二条院のさくらの花、——それはまさにかの若き日の花の宴の思い出につながる。その日に舞った春鶯囀の舞いと、青海波の舞い。青海波の舞いのタブローは、まさに十八歳の日の、さかりの藤壺の后との情事の思い出を鏤ぼめる。趙后飛燕の六朝の艶冶な美の陶醉につながる。光源氏は、念誦堂にこもって「ひ一日泣きくらし」ながら、その涙は女を失った悲しみよりも、それをかちえた日を追想する甘美な涙であったかもしれない。二条院のお前のさくら、花の宴の夜のハプニング、紅葉賀のおりの妖しいサインの送信——そうした思い出の綾を織り上げることによって、薄雲の歌はいよいよ華麗に、いよいよ物がなしい。

5

仮定にたつものいいはそしられるかもしれないが、「中宮定子に仕えなかったら清少納言はついに存在しなかったろう」という意見がある。このことは同時に「中宮定子に才女が宮仕えするという情況がなかったら枕草子はついに存在しなかったろう」ともいえよう。

作品は、その作家が書くというよりも時代が書かされる、その時代の世の中が書かされる。作家の創造的天才が書くというよりも、時代が、社会環境が、その作家の人間を形成し、作品を創作させる。